満鉄弘報活動に見る〈満洲〉イメージの一考察
——雑誌『満洲グラフ』を通じて——

立花　賢宏
（玉井研究会４年）

序　章
Ⅰ　『満洲グラフ』と満鉄弘報課
　1　満鉄弘報課の沿革
　2　『満洲グラフ』の誌面構成とその変遷
　小　括
Ⅱ　『満洲グラフ』に描かれた満蒙開拓民
　はじめに
　1　満洲移民の奨励
　2　満蒙開拓青少年義勇軍の描写とその限界
　3　開拓地女性への啓蒙
　小　括
Ⅲ　『満洲グラフ』中の「民族協和」——白系ロシア人を中心に
　はじめに
　1　「赤いロシア」ソ連と満洲の白系ロシア人
　2　コサックへの転回
　3　「民族協和」と防共への吸収
　4　白系ロシア人の風俗・習慣の紹介
　小　括
終　章

序　章

1932（昭和７）年に建国された満洲国は「王道楽土」「民族協和」の地として、当時多くの日本人を惹きつけていたことはよく知られている。しかし、満洲国の何が当時の日本人にとって魅力であったのかを想像することは我々現代人には難しく、また満洲の持つ悲劇的な結末もあってその多くは語られてこなかった。一方で、1906（明治39）年に設立し1945（昭和20）年の終戦まで存続した国策会社、南満洲鉄道株式会社（満鉄）は鉄道事業を中心に、広範囲に事業を展開し、その一つとして情報収集活動も行っていたことから、多数の史資料が現存している。本稿で扱うグラフ誌『満洲グラフ』もその一つである。本誌の特筆すべき点は、その編集・発行を満鉄の情報収集活動の中心拠点であった満鉄調査部ではなく、満鉄弘報課が担ったことである。弘報課の業務は調査部と共通する部分も多かったが、情報の収集よりもその発信を専門とした点に大きな相違がある。

情報の発信を担った弘報課が当時の〈満洲〉イメージの形成に果たした影響は小さくはなかったはずである。特に『満洲グラフ』はグラフ誌という特性に加えて、現存する中で、弘報課が最も長期間に渡り編集・発行したメディアであり、当時の〈満洲〉イメージを明らかにする上で最適な史資料の一つであると言える。

本稿は、かかるグラフ誌『満洲グラフ』の分析・考察を通じて、戦前日本人が抱いていた〈満洲〉イメージの一端を検討することを目的とする。それに先立ち、第Ⅰ節では『満洲グラフ』の編集・発行を担った満鉄弘報課の沿革と『満洲グラフ』の誌面構成および変遷を解説する。その上で、第Ⅱ節では、『満洲グラフ』が渡満した日本人移民、その中でも満蒙開拓民と呼ばれた農業移民をどのように扱ったのかを考察する。さらに第Ⅲ節では、満洲国内に住む民族の中でも異色な存在である白系ロシア人が『満洲グラフ』でどう描かれたのかを明らかにする。

なお、年は原則として西暦を用い、和暦を適宜補った。また史資料の引用にあたっては、旧漢字は原則として新漢字に改め、旧仮名遣いは原文通りにし、『満洲グラフ』は引用の際、煩雑さを避けるため誌名は省略している。加えて、本文中には、今日の視点で適正ではない表現も登場するが、当時の史料中の用語であるため、そのまま用いている。

Ⅰ　『満洲グラフ』と満鉄弘報課

1　満鉄弘報課の沿革

1932年９月、日本は満洲国政府と日満議定書に調印し、満洲国を正式に承認したが、翌年３月、国際連盟は総会でリットン報告書を採択、満洲国を否認した。これに反対した日本は国連から脱退し、国際的孤立を深めた。

かかる1933年９月にグラフ雑誌『満洲グラフ』は創刊された。創刊当時、内地でもグラフ雑誌は『アサヒグラフ』以外になかったこと、写真家淵上白陽[1]が編集に加わったことで前衛的で高い芸術性が保たれていたことから注目を浴びた。また南満洲鉄道株式会社弘報課が最も注力した出版物で、発行部数は7,000部から10,000部とされる[2]。定価は15銭であったが、20頁から30頁前後のボリュームで、多色刷りの表紙、芸術的な写真、効果的なレイアウト、英字キャプションなど、実験的な側面があるとは言え、内地に比べ自由な編集と贅沢な用紙や印刷を誇ったことを見ると、高品質・低価格のグラフ雑誌であったと言える[3]。

『満洲グラフ』については、2008年から2009年にかけてゆまに書房から出版された復刻版の「解説」に雑誌の概要や記事や掲載写真の特徴について論じられているが[4]、記事の記述背景やその変化については必ずしも十分な分析がなされていない。

一方で、『満洲グラフ』の発行機関であった満鉄弘報課に関しては、近年多数の研究成果がある[5]。中でもその変遷や組織構造に踏み込んだ研究としては、主に前掲の白戸や磯村の研究がある。そこで、ここではまず、『満洲グラフ』を分析・考察するに先立ち、満鉄弘報課について上記２点の研究成果を参照しながら、当該雑誌発行機関である満鉄弘報課発足までの沿革について概観すると以下の通りである。

- 1923（大正12）年、元陸軍中将高柳保太郎が予備役中、当時満鉄の渉外情報担当理事であった松岡洋右の誘いを受けて嘱託として満鉄に入り弘報係を創設。
- 1925（昭和２）年、総裁室文書課弘報係となる。
- 1927年、総裁室情報課が新設され、情報及び弘報業務を担当。
- 1930年、総務部庶務課弘報係となる[6]。
- 1936年、総裁室弘報課となる。

上記のとおり、満鉄において「弘報課」が職制上初めて現れるのは1936年のこ

とである[7]。弘報課には、資料課の情報業務と国際宣伝、総務部庶務課の弘報業務、地方部商工課の博覧会業務が移管されたことで、情報業務と弘報業務が一つの組織で管轄され、「満鉄の情報宣伝政策は戦略にそって活性化」[8]した。弘報課は庶務係、情報第一係、情報第二係、弘報第一係、弘報第二係の五つの係によって構成され、情報第一係は情報収集、情報第二係は情報機関への連絡統制、情報の整理編纂を、弘報第一係は内外宣伝弘報機関との連絡、言論機関の利用、刊行物・印刷物の発行、映画や写真・ポスターの製作・配布[9]、博覧会開催等、弘報第二係は国際宣伝をそれぞれ担当していた。本稿で扱う『満洲グラフ』は弘報第一係によってその発行が行われた。

次に、「弘報」という言葉についてであるが、弘報課の起源は、弘報係創設の提案・企画を担当した高柳保太郎の発案によるものであることが、前掲、磯村論文で指摘されている。高柳は「シベリア出兵の時のシベリア派遣軍の参謀長時代に、参謀部のなかに弘報という言葉を作った」人物であり、「当時は英語でもプロパガンダという言葉が非常に嫌われて、パブリシティという言葉を使ってい」たが、「弘報という言葉は英語のパブリシティが（高柳の一筆者注）頭にあって創作された」ということである[10]。

2　『満洲グラフ』の誌面構成とその変遷

1933年9月に創刊された『満洲グラフ』は、当初隔月刊で発行され、1935年5月号から月刊となる。1934年7月号（第6号）の「編集後記」においては、「満洲グラフの面目は、建設途上における満洲国の生きた、正しい相の歴史記録にある」、「興味中心のグラフは新聞社雑誌社に譲るべきではなからうか」と公刊の目的が語られている。左開きで見開き2頁に一つの記事を掲載するのが、創刊後しばらくは基本的な誌面構成で、写真とともに和文のキャプション、英文のキャプションが記載される。英文のキャプションについては、前掲、井村「『満洲グラフ』と満鉄の弘報活動」中に「海外広報の役割を担うこともめざした」と指摘がされており、『満洲グラフ』中でも「本号から英字表題を改めた。本誌海外進出第一段の構へである」[11]、「殊に本号は、邦文を全部英文に入れ替えて海外版を作る予定である」[12]との記載もある。

これら誌面構成に大きな変化が現れるのが、1939年8月号（第61号）からで、右開きとなり、小説や随筆などの読み物の割合が増え、英文のキャプションは消える。同年7月号で、裏表紙に表記される販売所がそれまでの満洲文化協会から

満洲日日新聞社に変わっており、これら変化と何らかの関係性があったと思われる[13]。

『満洲グラフ』の発行は満鉄弘報課が行ったが、誌面の内容は満鉄社内の事項や鉄道経営・建設のみならず、満洲国内の景勝地、多様な民俗・風俗なども盛んに取り上げられ、また1937年、日中戦争が勃発した際には、特集号を組み戦況を伝えている[14]など、満鉄社内外の事項よりも満洲国全体を宣伝しようとする狙いがあったことが窺える。また写真家淵上白陽が編集にあたったこともあり、「満洲の美術写真」と題する特集号が組まれたり[15]、学生の撮影した写真が掲載されるなど写真そのものを鑑賞することを目的とした記事も少なくない。

頁数は誌面構成が変化した1939年8月号頃以降が最も頁数の多い時期で、30頁前後であったが、1943年7月号頃になると26頁前後となり、印刷も不鮮明になった。その後、1944年1月号を最後に『満洲グラフ』は突然、何の予告もなく休刊となった。

小　括

以上、本節では『満洲グラフ』の発行機関であった満鉄弘報課について、既存の研究成果を参照しながら、その沿革を概観し、また『満洲グラフ』の全体的な誌面構成およびその変遷を明らかにした。これらを踏まえ、次節から『満洲グラフ』の記事の詳細な分析を行う。なお、本誌の特性から、これ以降、本文中で「次頁」と言う場合は原則、次の見開き2頁の記事を指すものとする。

Ⅱ　『満洲グラフ』に描かれた満蒙開拓民

はじめに

『満洲グラフ』では、満蒙開拓民が開拓や耕作に励む一方で、軍隊式の訓練を行い、鉄道やその沿線の治安維持に従事する姿を取り上げている。これらは「銃と鍬を持った武装移民」、「第二の屯田兵」としての満蒙開拓民のイメージを読者に想起させ、移民政策を宣伝する目的があったと考えられる。

満蒙開拓民とは、1931（昭和6）年満洲事変で日本が満洲を実質的に植民地化して以降、農民教育家の加藤完治[16]らが中心となり計画された対満農業移民を指す。この農業移民送出計画には加藤以外にも、関東軍の東宮鉄男・石原莞爾、農政学者那須皓・橋本伝左衛門、農林官僚石黒忠篤・小平権一らが関わっていた。

彼らの運動により1932年８月には、満洲移民費として予算総額20万7,850円が閣議通過し、同年10月には茨城県友部の国民高等学校で訓練を終えた第一試験移民団492名が満洲へ渡った[17]。この試験移民団の送出を受け、1936年８月には広田弘毅内閣が国策として20年間に100万戸を送出する計画を策定した。以後毎年計画的に送出が続き、1945年の敗戦時まで実施されることになった。

この政策の背後には、日本の管理下に置かれた満洲に、日本人人口を増やして治安維持を図り、対ソ戦略へ活用するという関東軍の思惑と、農村の疲弊を救済し、貧困対策にするという政府側の要請の利害の一致があった[18]。しかし、1937年７月、日中戦争の勃発以降、それまで満蒙開拓民の中核を構成していた20代から30代までの身体健康な壮年男子が軍隊に召集されたことや、戦時体制下で労働力需要が急増したことを背景に、徴兵前の満16歳から19歳までの少年たちを満洲へ送る満蒙開拓青少年義勇軍が創設された[19]。これらの政策により、終戦時満蒙開拓民の総数は27万人にのぼったともいわれているが[20]、1945年８月にソ連が満洲に侵攻すると、関東軍は敗走し、幼児、老人、女性を含む多くの開拓民が戦場に取り残され多数の犠牲者を出した。中には、命からがら逃げている途中、やむなく子どもを現地の中国人に預けざるをえなかった例も数多くあった。このような中で家族と離れ離れになった人々が、中国残留日本人孤児である[21]。また捕虜になった日本軍関係者が、多数ソ連領内に連行され、不法に抑留・使役されるという、シベリア抑留もその後長らく続いた[22]。

さて、これらの満蒙開拓民政策は、戦前、数多くのメディアによって宣伝・紹介がなされていたことが知られている。具体的には、満洲移民宣伝誌『拓け満蒙』、『新満洲』、『開拓』[23]や政府広報誌『週報』[24]、『写真週報』[25]などの雑誌が挙げられ、また新聞でもたびたび取り上げられていた[26]。『満洲グラフ』においても記事は多く、グラフ誌としての特性を活かした誌面づくりがなされている。

そこで、本節では『満洲グラフ』における満蒙開拓民の治安維持活動及び耕作・開拓に関する記事を初出から追い、当該雑誌が満蒙開拓民をどのように扱ったのかを明らかにし、読者にどのような〈満洲〉イメージを与えようとしたか考察する。

1　満洲移民の奨励

『満洲グラフ』で満蒙開拓民の記事が初めて掲載されるのは、1936年８月号（第25号）においてである。「鉄路自警村　満洲国の鉄道を守る日本人の村〈英字キャプション："Railway Guards' Settlements" at Night〉」との題で、鉄路自警村についての紹介がある[27]。鉄路自警村とは1935年、満洲国内鉄道の経営機関である鉄路総局が、所管鉄道沿線の治安維持を目的とし、沿線の農業開発および日本内地人の対満開拓民助長の見地から駐満軍隊の除隊兵をもって組織した満蒙開拓民の一形態である[28]。

先述したように、農業移民が計画され、実際に第一次試験移民団が渡満するのは1931年から1932年にかけてのことで、『満洲グラフ』の発行開始は1933年９月である。試験移民団渡満と同時に誌面上で取り上げることは不可能であったわけだが、しかし、開拓民が渡満してから満蒙開拓民に関する記述が初めて登場するまでに、若干の時間差があるのは疑問が残る。今回、『満洲グラフ』中に満蒙開拓民の記事が掲載されるまでの具体的な経緯を示す資料は判明しなかったが、理由は二つ考えられる。

一つは、1936年に総裁室弘報課が設置され、情報業務と弘報業務が一括して一つの組織内で管轄されたことである。弘報課設置以降「（弘報業務は一筆者注）それまで紹介宣伝にとどまっていたのが、社業宣伝にレベルアップ」[29]し、「情報と弘報の表裏一体的運用」[30]が実現したことで、鉄路総局管轄の鉄路自警村を取り上げることができたのだろう。もう一つは、1936年８月に広田内閣が七大重要国策で満洲移民がその一つとして採用されたことである。それまで、満蒙開拓移民に関して大衆の周知度や理解度は低く、知識人層でも否定的な意見が多かった。そこで、移民送出の国策化に伴い『満洲グラフ』で開拓民を記事として扱う気運が、弘報課内で高まったと考えられる。

さて、同記事「鉄路自警村　満洲国の鉄道を守る日本人の村」では「10年間の正式義務期間が終われば、もはや何らの負担義務といふべきものはなく、普通の移民と何等異なるところはない訳であるが、自ら、鉄路自警村の使命を感得してゐる村員はすべて軍隊的訓練を受けて来ただけあつて、日常生活も軍隊式に規則正しく、充実した、その日々を送つてゐる」とあり、鉄路自警村員のメリットを明示した上で、「銃と鍬」をもった移民象を描きだしている。

また同号で「言ふまでもなく、村員は、すべて満洲の土となる固い決意に生きてゐるので、粗末な満人家屋にランプを灯して生活するといふ様な凡そ内地の生活に比して不便な、そして寂しい生活をものともせず」[31]と記述があり、内地と比べ満洲での生活が不便であることは触れつつも、開拓民は強い意志をもって開拓に励んでいることを表現する意図があったと考えられる。

しかし、これらの記事では、1932年に第一次試験移民団が渡満して以降、問題となった、現地の元々いた農民や匪賊らの抵抗・襲撃による生命の危機や、「屯懇病」と呼ばれたホームシックを原因に移民団の中で多数の落伍者が現れ、帰国が相次いだことに関しては全く触れられていない。これより前、1932年12月、「第一次武装移民の精神動揺状況及び第二次以降の人選に関する要望書」[32]において、関東軍大尉東宮鉄男は、移民団の募集時に「本質に関する事項を明示せざる」ことや「内地にて比較的裕福なる生活をなし新聞雑誌の満洲熱にあおられて志願せる」ことが原因で開拓民の中に「決心動揺せるものあり」と指摘して、改善を求めていた。

また満洲現地でも、1933年７月に第一次試験移民団で幹部排斥の内紛が発生し、更に翌年の春には関東軍の土地の搾取に対し満洲住民が蜂起した土竜山事件が勃発するなど、移民送出には障害が生じていた[33]。それにもかかわらず、ここで挙げた二つの記事には匪賊の危険や開拓民内の不平不満に関する記述は皆無であり、要望書で問題とされた「満洲熱をあお」るとも捉えられかねない表現が見受けられ、多くの読者に対して誤解を生じさせたと思われる。一方で、ここでは『満洲グラフ』は、満蒙開拓民の客観的事実を伝えるよりも、開拓についての肯定的な宣伝や移民送出推進のための広報の手段として機能していたと言える。

だが、1936年12月になると、にわかに匪賊の襲来や退団者の存在について記述がなされる。記事の内容の要旨は次の通りである。

「実際に於て、第一次、第二次移民は処女地開拓の苦闘にも増して、生命の危機に関わる匪賊との血みどろの争闘をつゞけなければならなかつた。（中略）匪賊との争闘によつて、移民は広大な移民地に入りながら、昭和八年、九年は殆ど農耕すらも出来ない状態におかれ退団者相次ぐといふ悲境に遭遇したのである。その原因は（一）匪賊の危害が大きいこと（二）成功の時機が遠い将来にあること（三）差当り現金収入の少ないこと（四）身体病弱で心細くなること（五）家庭に悩みがあること（六）農業無経験者は農業に関し不安があること（七）他に有利な仕事に転じたい意志が有ること（八）植民精神に欠けてゐること等々で、第一次移民退団者は十年末に百八十七名に及び、これに戦死者を加へて、減員は四百九十二名中二百十名といふ多数を出した。第二次移民に就いても、本年八月末団員数二百八十五名であるから、これも第一次と同様の激減を示し、約四割は退団したといふことになる」[34]

数か月で記述内容が急変した背景は不明だが、事実にかなり即した内容となっていることは確かである。ただ、ここで注目したいのは同号の別頁において、「在郷軍人を以て組織され、みんな鉄砲を担いで遠征をするような気持ちで入植したのであった。だが、もう匪賊の心配は殆どなくなった」[35]、「土竜山事件のやうな不祥事を惹起したこともあるが、（中略）移民地付近の日満人の間には極めてなごやかな空気が張っている」[36]とある点である。すなわち、前頁で満蒙開拓黎明期の過酷な実態を過去の物語として語り、その後の頁で今は苦難の時代は終わり、日満の協調がはじまっているという誌面の構成になっているのである。

この日満の協調には在満朝鮮人も加えられて、協調の印象を強めている。例えば、「支那側の排日風潮を受けて満洲各地に於て民族的な虐待と桎梏の下にあった」在満朝鮮人が「満洲の出現によつて輝ける満洲国の一員として安住の地をこの新天地に定めるようになつた」[37]とした上で、「営口農村は大部分水田であるが先づ満人を使つて丁墾し、充分に地中の水分を抜いてから美田にする」[38]と説明書きの付された写真が掲載されている。

当初、高い前衛性と芸術的な誌面が特徴的だった『満洲グラフ』が移民宣伝誌的側面を持ちはじめたと言える。

2　満蒙開拓青少年義勇軍の描写とその限界

『満洲グラフ』では、先述の通り、1937年７月に発生した盧溝橋事件を発端に日中戦争がはじまると、同年９月号（第38号）から翌年４月号（第45号）まで日中戦争関連の特集が組まれる。この間、誌面の多くは戦況の紹介及び報道に割かれ、満蒙開拓民に関する記事はなくなる。再び誌面に掲載されるのは1938年６月号（第47号）である。「黎明の大地を拓く若き戦士」と題した記事は地平線の太陽に向かってラッパを吹く青年２名の後姿の写真が印象的で、続く次頁の「勇躍入植」では満蒙開拓青少年義勇軍に関して記述がある。満蒙開拓青少年義勇軍は、日中戦争による壮年男子の軍隊召集、戦時体制下における国内労働力需要の増大を背景に、それまで満蒙開拓民の対象であった20代から30代の身体健康な男子を確保することが困難になったために、1938年から募集を開始した移民の一形態である。募集の対象としたのは、徴兵前の満16歳から19歳までの男子であった。満蒙開拓青少年義勇軍の募集にあたっては、何度か募集要綱が拓務省から発表されており[39]、上記記事の記述はそれらをもとにしたものと考えられる。

満蒙開拓青少年義勇軍を扱った記事で特徴的なのは、掲載写真の多くに、少年

たちが隊列ないし整列をしたものが多い点である[40]。写真中の少年たちの多くは、戦闘服姿で、鍬またはシャベルを担いでいる。これは読者に、少年たちが「東洋の平和の礎を築く」姿を具体的にイメージさせ、徴兵前の少年たちといえども統制されていることをアピールするのに効果的であったと考えられる。記事の記述に目を転じると、「『金語楼はえゝなア、うふッ…』飴玉をしゃぶりながら、ポータブルを囲む娯しい夕のまどゐ」[41]や「約十町歩の土地分譲が約束されてゐるから、それぞれ集団移民地を形成するもよし、出身県の既設移民地に参加することも自由である」[42]等甘言も少なくないが、一方で「現地訓練所で三ヶ年間みっちりと本格的な実習訓練を受ける」[43]や「一切の使丁を使はず、日常生活では総て自治的に分担し、食物も自ら調理し、警備、衛生等のあらゆる仕事を通じて魂の練磨に資する」[44]、「気候は齊齊哈爾濱付近と大差なく、厳冬期には零下四十度にも降ることがある。雨量も少く、四季を通じて強い風が吹き捲るといふ有難くない話」[45]というように満蒙開拓青少年義勇軍における訓練や生活の厳しさにも言及がある。ただし、少年たちが深刻な郷愁から屯墾病に陥ったこと、訓練生間に摩擦が生じていたこと[46]、寮母をめぐっての男女間の問題、匪賊の危険などについての記述は皆無である。これは満蒙開拓青少年義勇軍以外の開拓民では、過去の物語としてとはいえども、匪賊の襲来や屯墾病の蔓延、落伍者の存在について語られていたのとは対照的である。

この理由としてはいくつか考えうるが、その一つとしては満蒙開拓青少年義勇軍が、実質的に開拓民として壮年男子を移出することが困難になったことによる代替案であり、これが失敗した場合、彼らに代わる移民候補者を探し出すことが不可能であったことが挙げられる。試験移民団の段階で、屯墾病に罹る者や落伍する者、反抗する者が現れたことで農業移民移出計画は、募集対象を少年にまで拡大することが示唆されていた。例えば、前掲「第一次武装移民の精神動揺状況及び第二次以降の人選に関する要望書」の「九、純真の年少者は可なり」には、「将来青少年中よりも採用するを可とせん」とある。つまり、満蒙開拓青少年義勇軍には精神的に成熟した壮年男子にはない純粋さも求められ、その純粋さがあれば、問題は解決されると踏んでいたのである。

しかし、実際には結果は壮年男子を中心とする開拓団と同じだった。そこで、満蒙開拓青少年義勇軍や彼らに関連する事実を扱う際には非常にデリケートな問題として配慮が必要となり、生活や訓練の厳しさを述べるのが限界となった結果、一部事実を覆い隠した記事が多くなったと考えられる。

ここで、同時期の満蒙開拓青少年義勇軍以外の開拓民を扱った記事を見ておこう。これらには匪賊の描写・記述に変化が見受けられる。すなわち、「一時も早く沿線の民衆を鉄道の味方たらしめ匪賊と分離させなくてはならぬ」[47]というように匪賊に関して、味方になる者とそうでない者がいるという認識を示し、先述の日満協調の表現よりもより踏み込んだ記述がなされているのである。これに加えて、日本人移民のおかげで経済的な豊かさ、治安が向上したと語る土着の満洲人を写真付きで掲載したインタビュー記事[48]や、山奥に潜んでいた匪賊が日本人移民に恭順し、文明化する過程をコマ割りの写真で紹介する記事[49]など写真を交えた誌面づくりがなされている。また、これらには「薬といへば「ヘロイン」、「モヒ」や怪しげな膏薬、薬草の外は知らなかった」[50]や「（日本語を―筆者注）若い小僧つ子達は皆一生懸命に習つとるが、おい等はもう駄目だい」[51]等、匪賊の野蛮性を強調する記述が併記されている。それまで匪賊に関する記事は文字情報のみであったことと比較すると、写真を多用したことで読者に匪賊の正体を同定させる効果があり、匪賊を日本人にとって啓蒙する対象としてみなす一つの契機になったと考えられる。

3　開拓地女性への啓蒙

『満洲グラフ』は1937年以降しだいに誌面において戦争色が強まることは、既に言及したが、それに伴い、満蒙開拓民をめぐる記述にも変化が生じてくる。

従前より、満蒙開拓民を扱った記事においては女性の姿も写真中に見受けられるが、「日ごと鉄道沿線の治安が向上し、毎年毎年、開拓民の耕作が続くのにあわせ、開拓民の子孫が増えている。そして今日、あたかも日本の平穏な村の如く、日本の子守唄の穏やかなメロディーが満洲の処女地に響き渡る（原文英語、筆者訳）」と背に赤子を背負った女性２人の写真を掲載した上で述べられる[52]など、日本女性が妻として満蒙開拓民男性を助け、「開拓地の第二世」[53]、つまり満州生まれの子どもたちを出産することを期待するような記述が多かった[54]。掲載される写真も女性単独のものはなく、男性あるいは子どもと一緒に写っているのがほとんどである[55]。

これら満蒙開拓民の女性の記述・描写に変化が表れはじめるのが、1940年12月号（第77号）、「開拓地の女性」からである。掲載される写真には女性が単独のものもあり、題の通り明らかに女性にスポットが当てられている。また記述も「開拓地では、女性は男性の開拓事業遂行の協力者として待遇されてゐる。何処の開

拓村を覗いても、みな実によく働く」と、男性を支える存在から、開拓に協力する存在へと期待される役割が変化している。ただ、続く1941年11月号（第88号）は、「開拓地婦人に黎明　改良農法の齎すもの」で「開拓地の婦人は一体に働かぬといふ話を聞くのであるが、農村出の婦人は相当働いてゐる。たゞ都会出の婦人、教育のある婦人ほど労働を嫌ふといふ弊風が見受けられる」と述べた上で、「改良農法では作業が分配されて居り、その仕組みによつては僅かな労力でも活用できるので（中略）改良農法の実践は開拓地婦人にとっても画期的な黎明となるのである。女の働く世界が続々拡げられて行く」との記述が見える。開拓民の中で働く女性とあまり働かない女性が混在する実情を確認しつつ、前者のタイプの女性を奨励する、すなわち女性の労働進出を促す記事が増えてきた。これは一方で、満洲においても内地同様、戦争の深刻化に伴って、成人男性の多くが、兵士として戦地に向かい、また国境警備に従事することとなり、その結果、村落の農作業では、成人女性の労働力が以前にも増して重要になったことを示している。

更に時が進むと「自分の子供を犠牲にして、この画期的な事業に挺身してゐる（開拓女子訓練所の―筆者注）所長熊井女史の話には深く心打たれるものがあった」[56]や、「私（取材者を指す―筆者注）は勤奉女子青年隊の有様を銃後に伝えるべく」[57]と言及がなされ、女性が銃後を担うことを訴えかける記事へと移り変わっていく。これら記事では女性が隊列を組んでいる写真も併せて掲載され、先述の満蒙開拓青少年義勇軍同様、戦時下の統制を読者には惹起させる役割を果たしたと考えられる。

小　括

以上、本節では『満洲グラフ』における満蒙開拓民の耕作・開拓及び治安維持活動に関する記事を初出から追い、『満洲グラフ』が満蒙開拓民をどのように扱ったのかを明らかにし、読者にどのような〈満洲〉イメージを与えようとしたか考察した。

満蒙開拓民について記事が掲載されるに従い、『満洲グラフ』は移民宣伝誌的性格を強め、必ずしも満蒙開拓民の実情を正確には記述していなかった。満蒙開拓青少年義勇軍の記事ではそれが顕著に表れ、農民移出計画の限界を窺うことができる。また匪賊をめぐっては襲来の事実は述べつつも、徐々に恭順する姿勢を示し、日本人が彼らを啓蒙する様子を紹介していた。『満洲グラフ』中で戦争色が強くなるにつれ、戦地へ動員された男性に代わる労働力として女性に焦点が当

てられはじめ、銃後が強調されていった。

Ⅲ　『満洲グラフ』中の「民族協和」――白系ロシア人を中心に

はじめに

満洲はソ連と国境を接していたことから、関東軍・内地政府にとって満ソ国境の治安維持は懸案事項の一つであった。『満洲グラフ』の中で、ソ連は「赤いロシア」等の呼称で記述され、国境警備を行う様子もたびたび登場し、ソ連を敵国として警戒していたことが窺える。しかし、一方で、1917年、ロシアで発生したいわゆる十月革命によって満洲へ亡命したロシア人についても頻繁に取り上げられていている。彼らは、「白系ロシア人」あるいは「エミグラント」と呼ばれ、「赤いロシア」人に対し満洲国ないし日本に味方するものとして友好的な存在として取り上げられている。

「白系ロシア人」あるいは「エミグラント」という呼称は、旧ロシア帝国国民を指すのであるが、「亡命白系露人も種族的には千差万別である。大ロシア人もあれば、小ロシア人、白ロシア人もあり、その他猶太人、コーカサス人等もある」[58]と、戦前から多数の人種・民族を含むものと考えられていた。『満洲グラフ』においても両方の呼称が使われているが、本稿では便宜上「白系ロシア人」の呼称を原則用いる。

さて、満洲国における白系ロシア人を扱った研究としては、竹内桂「満州国の白系ロシア人」『駿台史学』（明治大学史学地理学会、1999年）[59]、ヤン・ソレッキー著　北代美和子訳「ユダヤ人、白系ロシア人にとっての満洲　ハルビンで育って」『満洲とは何だったのか』（藤原書店、2004年）[60]、貴志俊彦『満洲国のビジュアル・メディア：ポスター・絵はがき・切手』（吉川弘文館、2010年）が挙げられる[61]が、メディア上の白系ロシア人については貴志が取り上げているのみで、彼らの実生活や「赤いロシア」、ソビエトとの比較を取り上げたものは少ない。

そこで本節では『満洲グラフ』における「赤いロシア」と白系ロシア人に関する記事を追うことで、白系ロシア人の風俗、習慣を明らかにしながら、対ソ連という意味で彼らがどのように『満洲グラフ』というメディア上で扱われたのかを考察する。

1　「赤いロシア」ソ連と満洲の白系ロシア人

『満洲グラフ』で、ロシアについての記事が初めて現れるのは、創刊後間もない1933（昭和8）年11月号（第2号）の「国境に近く〈英字キャプション：FRONTIER TOWNS OF MANGHOUKUO〉」においてである。「全く樹木のない広い展望、地平の涯が蒼茫は赤色の国ロシヤと、王道の国満洲が境を接するところだ」と記述があり、「国境」と説明書きのついた写真、駅に停車した機関車、駅に集まる人々を撮影した写真が掲載されている。次項「舗道に拾ふ――北満の秋――〈英字キャプション：SOME SNAPSHOTS ON A SIDEWALK, NORTH MANCHURIA〉」では、「ロシヤ人」の日常生活を写した写真が6点掲載され、満洲のエキゾチックな一面を取り上げている。ここではまだ「白系ロシア人」あるいは「エミグラント」といった表記はない。これら表記が使用されるのは、1934年3月号（第4号）「四民和楽〈英字キャプション：The harmonious co-operation all the peoples of Manchouku〉」で「赤いロシヤに容れられない数万の白系露人」と記述がなされてからで、これ以降、ソ連国籍を持つロシア人と白系ロシア人は区別して記述されるようになる[62]。

ここでは「彼等（白系露人―筆者注）は、赤系露人とちがつて、今でも燃えるやうな信仰を持つて朝夕敬虔な祈りを忘れない」[63]や、「終生祖国へ帰る事の出来ない白系の露人」[64]等に見られるように、白系ロシア人への賞賛や同情が窺え、ソ連に対し警戒心・嫌悪感を抱かせる誌面構成になっている。他方、「（白系ロシア人は―筆者注）今は、さうした戦慄をよそに国境の自然と人は極めて平和な明暮れを送つてゐる」[65]、「民族協和の国を捨てて、まるで国情の変わつてゐる赤い祖国へ帰へつて行かねばならぬ人々の面上には、何か知ら、不安な暗ひ表情が流れてゐる様に見える」[66]等、白系ロシア人の生活描写や、北満鉄路の譲渡完了後[67]、母国ソ連に帰らなければならないソ連国籍ロシア人の惜別感や不安感も取り上げることで、相対的に満洲を「王道楽土」、「民族協和」の地としてイメージを向上させたと考えられる。

また、北満鉄路の譲渡については「接収前、北鉄には約一万人余の露人が働ゐていたが、それも今回の北鉄譲渡によって職員六千三百余名は本国に引揚げることになるので、北鉄の駅と言わず、列車と言わず、露人が醸し出してゐたエキゾチツク雰囲気は喪失してしまふ事であらう」[68]や「二十世紀の初頭から、三十余年間、北満洲をT字型に画した北鉄によつて勢力を伸ばしたロシヤ人も、北鉄譲渡後、この五月から八月にかけて、従業員の大半は本国に引き揚げてしまつた。（中略）露人が作り、且つ露人が育てた北満洲第一の経済都市ハルビンは、殊に、スラブの色が褪せてしまつた」[69]と記述があり、ロシア人がソ連へ引き揚げてしまうことで満洲、特にハルビン独特の雰囲気が失われることへの懸念も示している。

2　コサックへの転回

1938年7月に「ソ連赤軍と日本陸軍がはじめて近代戦を戦った」[70]いわゆる張鼓峰事件の勃発後、『満洲グラフ』の中ではソ連について明らかに否定的な表現が用いられはじめる。同年10月号（第51号）「カザツク農民のユートピア　三河〈英字キャプション：SANHO DISTRICT, A GOD'S COUNTRY〉」では、「（ソ連政府は―筆者注）三河白系露人の掃滅を企図し、有力な赤色パルチザン隊を組織して三河を襲撃せしめ、露人の虐殺、部落の焼払ひ、家財の略奪等、世紀的暴虐の限りをつくした」と記載されている。「カザツク」とはコサックのことで、特にザバイカル・コサックを指す。帝政期ロシアで半農武装集団として組織されていたコサックは、いわゆる十月革命以降、反革命分子としてソ連によって迫害され[71]、その一部は満洲へ亡命し、三河に土着していた[72]。コサックを取り上げたのは、このような悲劇を背負うことになった原因であるソ連政府の残虐性を強調するとともに、満ソ国境付近に位置する三河の地にソ連と敵対する勢力が存在することを読者に印象づける目的があったと考えられる。

同号においてはコサックの特集が続く。例えば、「エルマークの昔を今に　三河のカザック」では、13世紀から20世紀の間のコサックの大まかな歴史について記述がある。「遠き昔、一八一二年には九万の精鋭をもつて無敵ナポレオンの大軍を追撃し、近くは日露の役に我が皇軍の好敵手ともなつたカザツク兵の華やかな声名は昔く人口に膾炙されてゐる」との書き出しではじまり、13世紀中葉にモンゴルからキルギス人がロシアに侵入したが、「一部露西亜人はこれら異民族の統治下に立つを潔しとせず、南方ドン、ドネプル、ヴォルガ河畔のステップ地方に逃れて、この地方に何等の支配力を戴かぬ自由の領域を形成した」のがコサックの起源であると説明されている。また、松岡洋右の長男、松岡謙一郎[73]の寄稿が「三河紀行」との題で掲載され、6点の写真とともに、8月15日から28日までの三河でのコサックとの邂逅や三河の風景を中心に記述がある。

ところで、コサックの牧歌的な生活様式の描写に関しては、前節で扱った満蒙

開拓民と類似点が多い。記事によっては、さらにコサックの生活を模範的に捉えるような描写・記述もあり、典型例としては「大地の恵み〈英字キャプション：RICH LANDS WHICH NEED NO FERTILIZATION〉」（第51号、1938年10月１日）と「鉄道自警村〈英字キャプション：RAILWAY SELF-PROTECTION VILLAGES〉」（第62号、1939年９月１日）が挙げられる。両記事内の写真では、農村の女性が耕地を背景に収穫物を腕一杯に抱えていて、そのシチュエーション・構図が類似している。また、同じ「大地の恵み」内の「愉しい昼餉」と題された写真には屋外でコサックが家族や仲間と囲む食事の風景が描かれており、これは「開拓地の一日」（第77号、1940年12月１日）で、「野良で賑やかな昼餉。粟の穂が重くたれてゐる。今年は何処も粟は豊作だ」と題して満蒙開拓民が昼食を囲む様子を撮影した写真と多数の共通点が見られる。ただし、ここで注目したいのはコサックの記事の方には「非常な努力家のカツザク農民」[74]、「新しき移住地を文字通り墳墓の地としてしつかと根を下ろし容易に動じない彼等の敦厚な生活態度」[75] などとあり、コサックの努力家気質や適応性を際立たせる記述がなされている点である。

これは、満蒙開拓民の理想像をコサックの生活に一部求めていたともみなすことができる。

3　「民族協和」と防共への吸収

1939年５月にモンゴル人民共和国と満洲国の間のノモンハン付近国境をめぐって、ソ連・モンゴル軍と満洲国軍が衝突し、ノモンハン事件が勃発する。事件当時、日ソ両国では「厳しい報道管制が敷」かれ、「ノモンハン事件に関する資料は、明らかに詳細かつ正確な情報を欠いていた」[76] とされている。

当該事件を受け『満洲グラフ』では同年８月号（第61号）において事件に関連した記事が特集される。「戦く満ソ国境」で、「（満ソの―筆者注）国境紛争の直接の動機となってゐるものは、国境線の不明確といふことで（中略）満洲国政府では、満ソ国境を調査して明確な画定をなすため、昭和十一年以来、満蘇国境画定委員会と紛争処理委員会の併置案をソ連側に示し、その同意を求めて来た」が、ソ連は、一度は応諾したにもかかわらず「日独防共協定の成立を契機に、突如ソ連は満洲国の提案を一蹴し去った」と紛争の背景については記述があるものの、戦況について具体的な記述はない。

この特集の後、『満洲グラフ』の中で白系ロシア人の取り上げ方が徐々に変化する。「民族協和の実相を――明るい勤労奉仕隊――」（第65号、1939年12月１日）では、日本人の女子と白系ロシア人の少年が協力して、土地整備をしている写真が掲載されて、「時は非常時だ、みんなの手で地均しをやらう、僕等の力で出来るだけは作りあげよう、と云ふ白系露人のお友達に力をあはせて、加勢しませうよ、私たちで出来ることなら」と日本人と白系ロシア人の共同作業を取り上げている。同記事内では更に「小さい人々が醸し出す民族協和の実相」とあり、白系ロシア人を満洲の民族協和を構成する一つの民族として捉えた記事となっている。翌月号（第66号）でも「民族協和の国〈英字キャプション：MANCHOUKUO THE LAND OF RACIAL HARMONY〉」でそれぞれの民族衣装を身にまとった日本人、満洲人、蒙古人、朝鮮人に交じって白系ロシア人女性が写真中に登場し、また次頁「民族協和の国」では上記各民族の生活の姿が写真で紹介されている。

それまでコサックを含めて白系ロシア人を記事で取り上げる際は、彼ら単独である場合がほとんどであった。それが、日本人をはじめ満洲内の他の民族とともに記事内で扱われたのには、白系ロシア人を「赤いロシア」ソ連との対比的な存在としてというよりも、「満洲国の白系ロシア」として満州国や日本に同化させる対象としてみなす傾向へと変化したと見ることができる。「学園に見るエミグラント　哈爾濱鉄道学院」（第74号、1940年９月１日）では「これ（白系ロシア人―筆者注）は何時も情緒的なものに取り扱はれると云ふ傾向をもつてゐた。しかしこのことは最近に於て移り変りつつある。（中略）満洲在住のロシヤ・エミグラントの民族的本質の変移は「白き東洋人」と云はるるものの創造の中にある」とし、白系ロシア人を満洲国・日本に住む人々と同じ「東洋人」と表現しており、その傾向が顕著である。

また、白系ロシア人は防共の協力者としても取り上げられ、「防共戦線の華と散つた若き英雄ナターロフの葬式後間もなく、（防共戦士の碑建立を―筆者注）白系露人事務局長キスリーツイン将軍が思ひつ」[77] いたとする記事や「（白系ロシア人開拓村のある家屋内の壁には―筆者注）ロシヤ語で書かれた大東亜戦争の漫画と防諜のポスターが並び、反対の壁には欧州新秩序建設戦争要綱と打倒コミンテルンの標語の印刷物が貼られてゐた」[78] 等、白系ロシア人が防共に取り組む姿を掲載している。実際に防共の意識がどの程度、白系ロシア人の間で浸透していたかは不明であるが、独ソ戦開始以降、ソ連の敗北を予想し、ソ連崩壊を願う者がいたとする資料[79] もあることから、これら記事は当時の白系ロシア人の意識をある程度反映した記事と言えるだろう。

4　白系ロシア人の風俗・習慣の紹介

本節の最後に補説として、ここまでで触れなかった、白系ロシア人の風俗・習慣に関する記事を紹介する。それに先立っては、『満洲グラフ』以外の資料として福田新生『北満のカザツク』（刀江書院、1941年）と黒澤忠夫『白系露人』（毎日新聞、1943年）を挙げておく。前者の著者福田新生は、1905年福岡県生まれの画家で、1926年帝展初入選をし、1949年には日展特選を受賞、一水会会員、日展会員となった。鋭い洞察力で書いた美術評論も多く、働く者、農民などを人間性を持ったリアリズムで描き続けた人物とされ、1988年に没した[80]。福田は『北満のカザツク』で「昭和十一年（1936年―筆者注）以来、満洲と日本を往来する機会が重な」ったと語っている。『満洲グラフ』中にも、「三河　カザックの生活」（第75号、1940年10月1日）や「コロンボ部落の一日」（第87号、1941年10月1日）など福田作の挿絵とともに寄稿がある。『北満のカザツク』はこれらの寄稿をまとめ、書き上げたもので、コサックの歴史や習俗、生活の様子を挿絵を交えながら記述している。

一方後者の著者黒澤忠夫は満鉄鉄道総局奉天庶務課長で、満鉄弘報課の招待で満洲を訪れた作家田郷虎雄の勧めで『白系露人』を執筆したとあとがきで語っている。この田郷虎雄は1901年長崎県生まれの劇作家、小説家である。田郷は戦時中は翼賛会所属作家として、体制に協力的だったことを、戦後しばらく筆もとれないほど深く恥じたとされる人物で、1950年に没した[81]。『白系露人』には白系ロシア人の風俗・習慣について詳細な記述があり、また彼らと日本をめぐる逸話についても触れられている。これら資料の詳しい分析は、今後の課題とし、今回は『満洲グラフ』における白系ロシア人の風俗・習慣の記事を取り上げるにあたって適宜参照する。

さて、『満洲グラフ』で取り上げられる白系ロシア人の風俗・習慣としては、主にロシア正教の祝祭である洗礼祭と復活祭（イースター）が挙げられる。洗礼祭はロシア語でクリエステェーニエと呼ばれ、キリストがヨルダン河で洗礼を受けた故事を記念した祭りである。『白系露人』中には「万物みな凍りついた極寒の松花江で、大きな氷の十字架を建てた斎場で行はれる」とあり、洗礼祭を行う日を「その昔、ナザレの基督がヨルダンの河で蝗と野蜜を常食とし獣の皮を身にまとふた奇怪な預言者―ヨハネから洗礼を受けた日」と故事を紹介している。『満洲グラフ』では「松花江氷上の洗礼祭　クリスチエーニエ〈英字キャプション：BAPTISMAL SERVICES ON THE ICE-PACKED SUNGARI〉」（第9号、1935年1月30日）で、祭壇の周囲を囲む十字架を持った人々や聖水式と呼ばれる儀式の様子を写真で掲載している。また「寒天の洗礼祭　哈爾濱松花江にて」（第78号、1941年1月1日）では、極寒の水に裸ないし水着で飛び込む水浴の様子を中心に写真を掲載している。

次に、復活祭であるが、ロシア語でパスハと言われ、『白系露人』では「老若男女の区別なく矢鱈に接吻を仕合ふ」祭りであると述べられ、『北満のカザツク』では「その日（復活祭当日―筆者注）を迎へるために、カザツク達は四十九日間の禁酒禁煙、一切の肉を断つ大精進を」行うとされている。『満洲グラフ』中には祝祭当日の様子を扱う記事はないが、「復活祭近し〈英字キャプション：AS EASTER APPROACHES〉」（第72号、1940年7月1日）、「エミグラントのよろこび　猫柳祭」（第94号、1942年5月1日）で復活祭前の準備をしている白系ロシア人の様子が描かれ、「聖体祭　哈爾濱の年中行事を飾る」（第96号、1942年7月1日）では復活祭あとの祝祭を特集している。『北満のカザツク』によれば、「（復活祭当日の―筆者注）儀式は、夜明けまでつづけられるのであるが、最後まで残るものは、（中略）老人達だけ」で、「若もの達は、（中略）精進落しの歓楽の世界へ飛びこ」み、「『フリストス、ヴォスクレス』と呼びかける男が自分の好きな若者であつて呉れるやうにと（若い娘達は―筆者注）待ち構へてゐる。それは、『キリスト、御復活』といふのであるが、当日に限つて、さう云ひさえすれば誰彼の区別なく接唇が許されるといふことになつてゐるからである」とある。これら当日の情事の様子を『満洲グラフ』に載せることは不適切との判断があったのかもしれない[82]。

小　括

以上、本節では『満洲グラフ』中における「赤いロシア」と白系ロシア人に関する記事を追うことで、対ソ連という意味で彼らがどのように『満洲グラフ』というメディア上で扱われたのかを考察し、また白系ロシア人の習俗について明らかにした。当初、白系ロシア人とソ連とは対比して取り上げられ、ソ連については必ずしも否定的な表現が用いられたわけではなかった。しかし、満ソの国境紛争が深刻化すると、ソ連政府が迫害対象としたコサックが誌面において登場し、ソ連の残虐性が強調される。また、同時にコサックの生活様式には日本人開拓民の理想を求めていた。ノモンハン事件勃発以降は、満洲の民族協和を構成する一民族として取り込む傾向が見られるようになり、防共に協力する存在としても提

えられた。

終　章

本稿では、戦前日本人が抱いていた〈満洲〉イメージの検討を目的に、満鉄弘報課の沿革とグラフ誌『満洲グラフ』の誌面構成を解説した上で、本誌記事の分析・考察を行い、以下のことが明らかになった。

第一に、満蒙開拓民の耕作・開拓及び治安維持活動をめぐっては、『満洲グラフ』は公刊後、しだいに移民宣伝誌的性格を強め、必ずしも満蒙開拓民の実情を正確には記述していなかった。満蒙開拓青少年義勇軍の記事ではそれが顕著に表れ、農民移出計画の限界を誌面上からも窺うことができた。また開拓民にとって懸案の一つであった匪賊については襲来の事実とともに、日本人が彼らを啓蒙する様子を写真・文章を巧みに利用して紹介していた。一方で、『満洲グラフ』中で戦争色が強くなると、戦地へ動員された男性に代わる労働力として女性に焦点が当てられはじめ、銃後が強調された。

第二に、『満洲グラフ』中における「赤いロシア」、ソ連と白系ロシア人に関しては、当初、両者は対比して取り上げられたが、ソ連については必ずしも否定的な表現が用いられたわけではなかった。しかし、満ソの国境紛争が深刻化すると、ソ連政府の迫害対象であったコサックが登場し、ソ連の残虐性が強調された。また、同時にコサックの生活様式には日本人開拓民の理想を求めていた。ノモンハン事件勃発以降は、満洲の民族協和を構成する一民族として白系ロシア人を取り込む傾向が見られるようになり、防共に協力する存在としても捉えられた。

これらから、読者は『満洲グラフ』を通して、満洲を開拓に適した土地としてイメージし、満洲国内においてはソ連の脅威を感じつつも、白系ロシア人やその他民族とともに安全に暮らすことが可能であると想像したと考えられる。

一方で、『満洲グラフ』において、満蒙開拓民や白系ロシア人を扱う際は、必ずしも正確な事実を記すのではなく、潤色や誇張が少なからずあった。『満洲グラフ』以外の他のメディアにおいてもこれと同様の傾向があったとすれば、当時の〈満洲〉イメージからは、満洲の開拓の厳しさや、複数の民族の混住や仮想敵国と近接することによる潜在的な危険性といったニュアンスが排除されていたのではないか。この点は『満洲グラフ』がどの程度これら〈満洲〉イメージを日本・満洲国内において浸透させたかという点と併せて今後の検討が望まれる。

1）　淵上白陽の来歴や作品、『満洲グラフ』との関係については、竹葉丈「絵画の効果、写真の機能―写真家・淵上白陽と『満洲グラフ』」『満洲グラフ』（復刻版第15巻　解説）（ゆまに書房、2009年）、飯沢耕太郎「写真のユートピア【淵上白陽と満洲写真作家協会】」藤原書店編集部編『満洲とは何だったのか』（藤原書店、2004年）、白戸健一郎「中国東北部における日本のメディア文化政策研究序説：満鉄弘報課の活動を中心に」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』9号（京都大学、2010年）に詳しい。淵上白陽（本名清喜）は、幾何学的な画面構成、ブレによる動きの表現、多重露光によるモンタージュなどを特徴とする「構成派」と呼ばれた写真家の一人。1889年11月4日生まれ。満洲へは1928年10月に渡り満鉄入社、1933年9月、『満洲グラフ』を創刊した。1941年3月に退社し、戦後『満洲の回想』（恵雅堂、1958年）で満鉄時代に撮影した写真をまとめている。1960年2月8日没。

2）　『満鉄調査機関要覧　昭和11年度』によれば、1936年度には7,000部が発行されたという。この点について、白戸は、「1940年度の時点で7000部、1941年3月号では全体の発行部数は10000部」と述べている。白戸「中国東北部における日本のメディア文化政策研究序説」、128頁参照。

3）　ちなみに、『アサヒグラフ』の当時の定価は80銭。また、日中戦争後に政府が国民啓蒙のため発刊したグラフ雑誌『写真週報』の定価は10銭だったが、同誌の用紙や印刷の質は、他のグラフ誌と比較すると低かったとされる。清水唯一朗「国策グラフ『写真週報』の沿革と概要」（玉井清編『戦時日本の国民意識　国策グラフ誌『写真週報』とその時代』（慶應義塾大学出版会、2008年））参照。

4）　井村哲郎「『満洲グラフ』と満鉄の弘報活動」『満洲グラフ』（復刻版第15巻　解説）（ゆまに書房、2009年）、戦暁梅「『満洲グラフ』に投影された「満洲美術」の諸相」『満洲グラフ』（同上）、竹葉丈「絵画の効果、写真の機能―写真家・淵上白陽と『満洲グラフ』」『満洲グラフ』（同上）、舘かおる「『満洲グラフ』にみる女性たちのフォトモンタージュ」『満洲グラフ』（同上）、西原和海「『満洲グラフ』への視線」『満洲グラフ』（同上）、劉建輝「可視化された「夢」―『満洲グラフ』にみるモダン満洲の実像と虚像」『満洲グラフ』（同上）。

5）　具体的には、磯村幸男「満鉄の情報・弘報活動」『アジア経済』29号（1988年4月）、井村哲郎「満洲事変後満鉄海外弘報・情報活動の一齣―ヘンリー・W・キニー覚書―」『アジア経済』34号（1993年10月）、ルイーズ・ヤング著（加藤陽子ほか訳）『総動員帝国』（岩波書店、2001年）、里見脩「卓越した対外（弘報）宣伝活動」（藤原書店編集部編『満鉄とは何だったのか』（藤原書店、2006年））、中塚亮「韓世昌による崑曲来日公演とその背景について―満鉄の弘報活動とその関係から」『名古屋大学付属図書館研究年報』6巻（2008年）、西原和海「満洲における弘報メディア―満鉄弘報課と『満洲グラフ』のことなど」『国文学：解釈と教材の研究』51巻（学燈社、2006年）、白戸健一郎「中国東北部における日本のメディア文化政策研究序説：満鉄弘報課の活動を中心に」『京都大学生涯教育学・

図書館情報学研究』９号（2010年）などがある。

6）白戸「中国東北部における日本のメディア文化政策研究序説」は、「1930年に主な弘報業務は総務部庶務課に、情報業務は年史を作成し調査や統計業務を行っていた資料課に移管される」と論じているが、磯村「満鉄の情報・弘報活動」は「情報業務は多分交渉部資料課に吸収されたのだと思います。情報課に所属していた課員がだいぶこの交渉部資料課に移っているからです。交渉部資料課は情報部をうたわないで、渉外資料の収集が仕事になっています」と記しており、資料課内で具体的な目的を持って情報業務が行われていたかどうかは、必ずしも明確ではない。

7）創刊当時『満洲グラフ』の編集は、満鉄総裁部庶務課が担当していた。「弘報課」として『満洲グラフ』編集を担当するのは第28号（1936年、11月１日）からである。

8）白戸健一郎「中国東北部における日本のメディア文化政策研究序説」、124頁。『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』９号（2010年）。

9）竹葉丈、三浦乃利子編『異郷のモダニズム　淵上白陽と満洲国写真作家協会』（名古屋市美術館・毎日新聞社、1994年）には写真、ポスターが収録されている。

10）ただし、この点について、前掲、西原「満洲における弘報メディア」では「「弘報」という言い方を初めて使い出したのは、シベリア出兵時の浦潮派遣軍参謀長・高柳保太郎だったという、弘報課関係者の間の「伝説」」と指摘している。

11）「編集後記」（第９号、1935年１月30日）。

12）同上。

13）白戸「中国東北部における日本のメディア文化政策研究序説」では「宣伝媒体の利用」『弘報内報第６号』（1940年７月）で、次のような記述があると指摘されている。「昨年来種々苦心を払ひ改善を加え来たつてゐるが、「満州グラフは大衆に親しまれない」との批評が行われ、まだまだ及ばざる点多々ありと認められるのである。従って、ともかく『満洲グラフ』がどんどん売れるようになることに当面の目標を置き、大衆化方策強化のため宣伝媒体利用を兎角考研中である」。

14）具体的には表紙に「北満洲の火山・北支事変画報」（第38号、1937年９月１日）、「支那事変　北支特集号」（第39号、1937年10月１日）、「支那事変特集　支那事変画報」（第40号、1937年11月１日）、「事変特集」（第41号、1937年12月１日）、「事変特集」（第42号、1938年１月１日）、「南京攻略特集」（第43号、1938年２月１日）、「事変特集」（第44号、1938年３月１日）、「再建支那の鼓動」（第45号、1938年４月１日）と題され、８号に渡って特集号が組まれた。

15）第23号（1936年６月１日）、第54号（1939年１月１日）など。

16）農本主義者、教育者。1884年１月22日生まれ。1926年日本国民高等学校を創設。筧克彦の古神道理論にもとづく独特の農本主義で農民の子弟を教育した。満洲事変後は満洲移民を推進、満蒙開拓青少年義勇軍中央訓練所所長となる。1953年日本高等国民学校（戦後に改称）校長に復職。1967年３月30日死去。東京出身。東京帝大卒。（『日本人名大辞典』（講談社、2001年）の「加藤完治」の項目より）。なお、中村雪子『麻山事件―満洲の野に婦女子四百余名自決す』（草思社、1983年）によれば、筧克彦の古神道論とは「日本古来の惟神（かんながら）の道を説いてそこに万古不朽の崇高なる日本精神の実在を確認し、それを基として日本人の生命哲学をうち立てるというもので、一般にはかなり難解なものとされ」た。しかし、加藤は「彼独得の口調と平易な言葉」によって読み説き「当時の農村青年たちの心に大きな影響を与え」ていたということである。

17）満洲開拓史復刊委員会『満洲開拓史』（全国拓友協議会、1980年）。なお、続く昭和８年７月には第二次試験移民団が渡満している。

18）上笙一郎『満蒙開拓青少年義勇軍』（中央公論社、1973年）。

19）満蒙開拓青少年義勇軍に関しては、上笙一郎『満蒙開拓青少年義勇軍』（中央公論社、1973年）、櫻本富雄『満蒙開拓青少年義勇軍』（青木書店、1987年）、藤原瑞穂「満蒙開拓青少年義勇軍―少年達の眼に映し出された満洲」（慶應義塾大学玉井清研究会卒業論文、1997年）、白鳥道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』（北海道大学出版会、2008年）などを参照。

20）国史大辞典編纂委員会編『国史大辞典』（吉川弘文館、1988年）の「満蒙開拓」の項目より。

21）佐々木毅、鶴見敏輔、富永健一、中村政則、正村公宏、村上陽一郎編『戦後史大事典』（三省堂、2005年）の「中国残留日本人孤児」の項目によれば、中国残留日本人孤児とは、その大半が「戦争中送り出された「満蒙開拓団」の子女で」ある。日ソ中立条約に違反したソ連の参戦後の満蒙開拓団の悲劇的な境遇については、中村雪子『麻山事件―満洲の野に婦女子四百余名自決す』（草思社、1983年）や笠間満洲会『笠間満洲分村誌』（ふるさと文庫、1981年）などに詳しい。

22）前掲『戦後史大事典』によれば、ソ連参戦により「満洲、樺太、千島で降伏した日本軍兵士と一部民間人はシベリアへ送られ抑留」され「その数は約86万人といわれる」とある。「捕虜はシベリアの内務人民委員部の管轄下におかれ、囚人労働と同格ではたらかされ」た。「一般に条件はきわめて劣悪」で、死者は「全期間で６万8000人にのぼった」。

23）『拓け満蒙』、『新満洲』、『開拓』については山畑翔平「昭和戦中期における満州移民奨励施策の一考察―移民宣伝紙を通じてみた満州イメージとその変容―」『政治学研究』第41号（慶應義塾大学法学部政治学科ゼミナール委員会、2009年）に詳しい。

24）例えば「満洲開拓事業の展望　拓務省」（『週報』第164号、1939年12月６日）。

25）例えば「君等を迎へに帰つたぞ　満蒙開拓青少年義勇軍現地報告隊」（『写真週報』92号、昭和1938年２月12日）。

26）例えば「深川から満洲へ　汗の生活に励む更生ルンペン　天照園移民村を訪ふ」（『朝日新聞』、1932年７月５日朝刊）、「満蒙開拓者を養成」（『朝日新聞』、1937年12月19日朝刊）など。

27）次頁には「満洲の大地を拓く　自警村の人々（黒山頭・女兒河自警村にて）〈英字キャプション：BREAKING UP THE VIRGIN SOIL OF MANCHOUKUO〉」と題して農耕牧畜を営む鉄路自警村の人々の写真が掲載されている。

28）満洲開拓史復刊委員会『満洲開拓史』（全国拓友協議会、1980年）。

29）磯村幸男「満鉄の情報・弘報活動」『アジア経済』29号（1988年4月）。

30）同上。

31）「鉄路自警村は若く逞しい開拓者の集り」（第25号、1936年8月1日）。

32）満洲開拓史復刊委員会『満洲開拓史』（全国拓友協議会、1980年）より引用。

33）幹部排斥運動や土竜山事件に関しては、満洲開拓史復刊委員会『満洲開拓史』（全国拓友協議会、1980年）に詳しい。

34）「北満洲の沃野に築く　日本移民の理想郷〈英字キャプション：THE UTOPIA OF JAPANESE SETTERS IN NORTH MANCHURIA〉」（第29号、1936年12月1日）。

35）「平和な村に　鉄道の触手は延びる〈英字キャプション：A DAY IN THE SETTLEMENTS〉」（第29号、1936年12月1日）。

36）同上。

37）「朝鮮人安全農村〈英字キャプション：KOREAN SETTLEMENTS〉」（第12号、1936年12月1日）。

38）同上。

39）例えば、「昭和13年度満洲青年移民募集要綱」には次のように書かれている。「我が純真な青少年諸君が満洲に渡り、大陸の新天地で農業を通して心身の鍛練をはげみ、成長してからは満蒙開拓の中堅人物になることは小さく見れば青少年諸君の身を立てる為でもあり、大きく見れば我国と其の兄弟国である満洲国との双方の発展に役立ち、延いては東洋平和の礎を築くことになるのであつて、之こそ男子としての大きな喜びでありませう。此の点から考へまして、拓務省は従来の壮年者を以て編成する集団農業移民の外に、新に青少年を以て組織する開拓団、即ち青少年義勇軍送出の計画を立てまして、差当り昭和13年度に於て三万人を募集、送出することを決定したのであります。就きましては遠大な理想に燃える全国青少年諸君が多数奮つて此の企挙に賛同せられ、此の募集に応ぜられんことを切に希望する次第であります。」白取道博編『満蒙開拓青少年義勇軍関係資料』第4巻（不二出版、1993年）より引用。

40）「勇躍入植」（第47号、1938年6月1日）、「訓練所通信〈英字キャプション：LIFE AT A TRAINING CAMP〉」（第47号、1938年6月1日）、「栄えあれ！我等の義勇軍〈英字キャプション：YOUNG MEN'S TRAINING CAMP AT THE SETTLEMENT〉」（第52号、1938年11月1日）、「近づく春に備へて　満洲開拓青少年義勇軍の生活〈英字キャプション：THE LIFE OF VOLUNTEER YOUTH IMMIGRANTS〉」（第57号、1939年4月1日）、「青少年義勇軍」（第77号、1940年12月1日）、「青少年義勇隊の一日」（第92号（臨時増刊号）、1942年）、「実を結ぶまで　開拓青年義勇隊の戦ふ姿」（第106号、1943年5月1日）、「開拓義勇隊」（第106号、1943年5月1日）がある。

41）「訓練所通信〈英字キャプション：LIFE AT A TRAINING CAMP〉」（第47号、1938年6月1日）。

42）「栄えあれ！我等の義勇軍〈英字キャプション：YOUNG MEN'S TRAINING CAMP AT THE SETTLEMENT〉」（第52号、1938年11月1日）。

43）同上。

44）「近づく春に備へて　満洲開拓青少年義勇軍の生活〈英字キャプション：THE LIFE OF VOLUNTEER YOUTH IMMIGRANTS〉」（第57号、1939年4月1日）。

45）「アルカリ地帯に戦ふ青少年義勇隊―土に恵まれぬ苦労―」（第86号、1941年9月1日）。

46）訓練間の摩擦が騒動に発展した例としては、昌図事件が知られている。満洲開拓史復刊委員会『満洲開拓史』（全国拓友協議会、1980年）によれば、1939年5月5日の運動会を端緒に新旧渡満中隊間にあった感情の疎隔が悪化、それが訓練生間にも漸次波及し3回に渡って衝突した事件で、特に3回目の衝突では銃器を持ちだし発砲する騒ぎにまでなったという。3名の死者、4名の重軽傷者、123名の移監者を出し、そのうち37名が起訴されたという未曾有の大事件であった。

47）「鉄道愛護団の話」（第49号、1938年8月1日）。

48）「移民地の声を聴く」（第52号、1938年11月1日）。

49）「匪団山塞を下る〈英字キャプション：BANDITS WHO HAVE SUBMITTED FAITHFULLY ENGAGE IN USEFUL OCCUPATIONS〉」（第53号、1938年12月1日）。

50）「鉄道愛護団の話」（第49号、1938年8月1日）。

51）「移民地の声を聴く」（第52号、1938年11月1日）。

52）「異郷に響く　日本の子守唄〈英字キャプション：JAPANESE LULLABIES OVER DESOLATE MANCHURIAN PLAINS〉」（第25号、1936年8月1日）。

53）「鉄路自警村は若く逞しい開拓者の集り」（第25号、1936年8月1日）。

54）上記以外には、「鉄自警村　満洲国の鉄道を守る日本人の村〈英字キャプション："Railway Guards' Settlements" at Night〉」（第25号、1936年8月1日）、「満洲の大地を拓く　自警村の人々（黒山頭・女兒河自警村にて）〈英字キャプション：BREAKING UP THE VIRGIN SOIL OF MANCHOUKUO〉」（第25号、1936年8月1日）、「平和な村に　鉄道の触手は延びる〈英字キャプション：A DAY IN THE SETTLEMENTS〉」（第29号、1936年12月1日）、「移民地の声を聴く」（第52号、1938年11月1日）、「鉄道自警村〈英字キャプション：RAILWAY SELF-PROTECTION VILLAGES〉」（第62号、1939年9月1日）、「大陸の土と闘ふ」（第77号、1940年12月1日）、「開拓地の一日」（第77号、1940年12月1日）がある。

55）例外的に前掲「満洲の大地を拓く　自警村の人々（黒山頭・女兒河自警村にて）」では複数枚掲載写真があるうちの1枚に放牧中と見られる牛が女性と共に写っている。また前掲「鉄道自警村」には、こちらも複数枚掲載写真があるうちの1枚に大豆を収穫する女性の姿のみの写真がある。

56）「開拓女子訓練所を訪ねて」（第100号、1942年11月１日）。

57）「聖汗に微笑む乙女　勤労奉仕隊女子青年隊」（第110号、1943年９月１日）。

58）黒澤忠夫『白系露人』（毎日新聞、1943年）。

59）白系ロシア人の対ソ情報活動への利用とソ連との関係における統制を中心に、日本が満洲国の白系ロシア人に対してどのような政策をとったのかを論じている。

60）満洲生まれの著者の回顧録とともに、ロシア帝政期から日本の敗戦までの期間における満洲の白系ロシア人の生活について論じている。

61）この他には、小林英夫、張志強共編『検閲された手紙が語る満洲国の実態』（小学館、2006年）があり、白系ロシア人がやり取りした手紙をもとに、対ソ情報活動や白系ロシア人の生活について論じている。

62）同年、異なる政治思想を持つ白系ロシア人団体が乱立し、無統制であった状態を是正すべく白系露人事務局が設立された（竹内桂「満州国の白系ロシア人」『駿台史学』（明治大学史学地理学会、1999年））。これと『満洲グラフ』で「白系露人」の表記が使用されるようになったことの間には直接的な関連性は確認できなかったが、白系露人事務局の設立により「白系露人」という言葉が普及し始めた一例とみなすことはできるだろう。

63）「ハルビンとエミグラントたち〈英字キャプション：HARBIN AND ITS WHITE RUSSIAN EMIGRANTS〉」（第10号、1935年５月１日）。

64）「国境を越えて赤い祖国へ〈英字キャプション：Across the Border and to their Native Land.〉」（第12号、1935年７月１日）。

65）「国境の人と自然〈英字キャプション：SCENERY ON THE WESTERN BOUNDARY OF MANCHOUKUO（NEIGHBOURHOOD OF MANCHULI）〉」（第10号、1935年５月１日）。

66）「退職金を受取る人々（英字キャプション：Receiving the Retirement Allowances〉」（第12号、1935年７月１日）。

67）北満鉄路の買収に関しては満鉄会編『満鉄四十年史』（吉川弘文館、2007年）に詳しい。1935年３月満州国は、買収価格１億4,000万円と従業員の退職金3,000万円の支払いを条件に、ソ連から1,732.8kmの鉄道とその付属施設を買収した。満鉄は満州国から北満鉄路の経営を受託し、この結果、満鉄は満洲国内の鉄道のほとんどを経営・建設することとなった。引継従業員は約11,000人で、ほとんどは中国人であったが、約700人の白系ロシア人も含まれていたとされる。

68）「北鉄スナップ〈英字キャプション：SNAP-SHOTS ALONG THE NEW MANCHOUKUO BROAD GAUGE（FORMER NORTH MANCHURIA RLY.）〉」（第10号、1935年５月１日）。

69）「ハルビンの秋〈英字キャプション：AMID THE SAD RUSTKING OF FALLING LEAVES, HARBIN PREPARES FOR THE APPROACH OF DREARY WINTER〉」（第15号、1935年10月１日）。

70）中山隆志「張鼓峰事件再考」『防衛大学校紀要』第70号（防衛大学校、1995年）。

71）ソビエト時代におけるコサックの迫害に関しては、Elena Kozoulina「シベリアのコサック：ポストソビエト空間に適合するアイデンティティ（原題：The Cossacks of Siberia: Tailoring Identity in Post Soviet Space）」『社会科学ジャーナル』（国際基督教大学学報、2005年）に詳しい。存命のコサックへのインタビューを通じて“in the Soviet Union until 1947, killing a Cossack person was not considered an infringement of the law.（ソ連では、1947年までコサックの殺害は法律を侵害するとは考えられていなかった）”, “it was forbidden to talk about the Cossack Army, forbidden to mention anybody from among their relatives who were Cossacks.（コサック兵士について話すことや、コサックとの血縁関係がある人について話題にすることは禁じられていた）”と指摘している。

72）満洲のコサックについては、黒澤忠夫『白系露人』（毎日新聞、1943年）に記述がある。「彼等（コサック―筆者注）はアルグン河を渡つて蘇連側から満洲領へ越境して来て、満洲側には何の断りもなく勝手に自費で移住したのが抑々の初りなのである」とある。

73）1945年、写真通信社「サンニュース・フォトス」（現サンテレフォト）を設立。57年、日本教育テレビ（現テレビ朝日）の設立に加わり、65年から20年間テレビ朝日副社長を務めた。71年、日本ケーブルテレビジョンの設立に参画、米CNNの日本への導入に尽力した。1994年12月没。「松岡謙一郎氏（死去）」（『日経産業新聞』、1994年12月26日）参照。なお松岡謙一郎が山河を旅行していた当時、父洋右は満鉄の総裁を務めている。

74）「大地の恵み〈英字キャプション：RICH LANDS WHICH NEED NO FERTILIZATION〉」（第51号、1938年10月１日）。

75）「安住の相をここに〈英字キャプション：THE LIFE OF COSSACK PEASANTS〉」（第51号、1938年10月１日）。

76）アルヴィン・D・クックス、高橋久志・立川京一訳「ノモンハン事件再考」『軍事史学』128号（軍事史学会、1997年）。

77）「防共戦士を祀る　世界最初の碑」（第85号、1941年８月１日）。なお黒澤忠夫『白系露人』（毎日新聞、1943年）中に碑の前には「反共無名戦士の碑　本記念碑は日満露官民各方面の義捐に依り、独り白系露人のみならず反共闘争に起ちたる各民族の尊き犠牲者の慰霊並に其の勲功を永遠に記念せむが為に一九四〇年五月に起工、翌四一年六月八日に除幕式を挙行したるものなり　本碑右側の浮彫は天軍長アルハンゲルが悪魔克服を、左側は勇将ゲオルギーが人類の仇敵を膺懲しつつあるを表象せしものにして、背面のスラヴヤン文字は“反共闘争犠牲者の諸霊に献ぐ”を刻しあるものなり　観光協会」と立て札があるとの記述がある。

78）「模範白系露人（エミグラント）開拓村　ニコライエフカ」（第108号、1943年７月１日）。

79）小林英夫、張志強共編『検閲された手紙が語る満洲国の実態』（小学館、2006年）で1941年10月２日発の白系ロシア人の手紙中に「レニングランドが陥落したら、ヒットラーがロシヤに臨時政府を作り、白系の天下が来るだらう、ロシヤが共産

党の魔手から解放されたらどんなによいだらう、降参さへすれば戦争は終るのに、スターリンは飽くまで戦はうとしてゐる」とある。

80）近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編『近代日本社会運動史人物大事典』（日本アソシエーツ、1997年）の「福田新生」の項目より。また『満洲グラフ』中の福田に関しては、戦暁梅「『満洲グラフ』に投影された「満洲美術」の諸相」『満洲グラフ』（復刻版第15巻　解題）（ゆまに書房、2009年）にも言及がある。

81）日本近代文学館編『日本近代文学大事典』（講談社、1983年）の「田郷虎雄」の項目より。

82）1933年、京都帝国大学法学部教授の滝川幸辰が、中央大学法学会で行った講演「トルストイの『復活』に現はれた刑罰思想」の内容が赤化思想であると問題視され、辞職に追い込まれるいわゆる滝川事件が起きている。復活祭はレフ・トルストイ『復活』において劇中の舞台の一つにもなっている。1942年９月には満鉄調査部でマルクス主義的な調査研究活動に従事していた職員が関東軍により逮捕される（満鉄調査部事件）が、『満洲グラフ』中に復活祭を取り上げることで憲兵隊の監視の目が向くことを恐れ、復活祭当日を記事にしなかった可能性も推察される。

南アフリカ共和国における人身取引対策の現状と課題
――国家間協力の重要性――

西牟田　咲
（井上研究会４年）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　全世界的な人身取引の現状と対策
　1　「人身取引」とは何か
　2　全世界的な現状
　3　人身取引のメカニズム
　4　一般的な対人身取引のための取り組み
　5　対人身取引政策における「国際協力」の重要性
Ⅲ　南アフリカ共和国における人身取引の現状と対策
　1　南アフリカ共和国における人身取引の現状
　2　南アフリカ共和国における人身取引のメカニズム
　3　南アフリカ共和国の人身取引対策
Ⅳ　南アフリカ共和国の人身取引対策が抱える問題と今後の課題
　1　問　題
　2　国家間の政治経済的格差がもたらす結果
　3　今後の課題――国家間協力のさらなる推進
Ⅴ　結びにかえて

Ⅰ　はじめに

人身取引が世界的な規模で各方面に恐ろしい状況を作り出しているという現実については、もはや異論を挟む余地はない。アメリカ政府のデータによると、年間60～80万人の男女・子どもが国境を越えて売買されており、被害者は世界中で